

佳作

## いちばん愛してくれた人へ

新潟県 長岡市立越路中学校三年 馬場 文瑠

初めて知った。知りたくもなかった。胸を一突きにされたような、心が凍えるような喪失感を、目の前の現実にもできない無力さを。全てが昨日のよう感じられてしまう、失って初めて気付く、あの日々を……。

父が倒れた、らしかった。その日は部活に行っていて、帰るなり顔を青くした親戚に車に乗せられ、病院に連れられた僕の目に飛び込んだのは、ベッドの上で寝ている父の姿だった。最初こそなるべく明るく振る舞っていたが、父の死を聞かされたとき、涙を堪えることはできなかった。初めて体験する、大切な人の死だった。心がぐちゃぐちゃになって、しばらく立ち直れなかったのを覚えている。結局、一年という時間の流れが解決した。辛かった。不安を吐き出したかった。でも誰も心配させたくはなかった。気持ちの整理もできずに、心に蓋をした。

しかし最近、ようやく自分の気持ちの整理ができた気がする。その上で、僕は父からとても大切なことを学んだ。これを読んでくれたあなたにも、それを伝えたい。

思えば、会社勤めで出社も早く、帰宅も遅かった父とは、心ゆくまで話せる機会が少なかったと、今になって気付いた。それだけではなく、父も自分も寡黙な方だったから、心の内を本人に伝えることが苦手だった。だから、父が僕のことをどのよう考えていたのかは、どんなに頭を悩ませても分からなかった。そこで、僕は母に尋ねてみることにした。すると母は、どこか懐かしそうな顔をして、たまに張り切りすぎてしまうから心配していた、いつも僕のことを気にかけていた、と教えてくれた。驚いた。父が、僕のことをそんな風に思っていたなんて。そして同時に、なぜ今まで気付けなかったのだろう。父は、僕のことを愛してくれていたのだと、初めて実感することができた。思えば僕が、父の死を知らされたときに気持ちを抑えることができなかったということは、少なくとも、自分も父のことを想っていた、愛していた証拠になるのではないかと思う。父にとって自分はどんな存在だったのか。そして自分にとって父はどんな存在だったのか。その問い

の答えは至って簡単だった。父は僕を愛して、僕は父を愛していたのだ。当たり前すぎて、お互いが言葉にして伝えようとはしなかったこと。でも言葉にしなかったからこそ、最後まで共有することができなかった、かけがえのない想い。そう。自分がどれだけ相手を大切にしているも、相手がどれだけ自分を想ってくれていても、しっかり言葉にしないと伝わらないことがあると気付けた。だからこそ、そんな人たちと想いを共有し続けていけるように、ちゃんと言葉にして伝えることの大切さを、いつまでも憶えていたい。

だから、今更だけれど僕も、僕を一番愛してくれた人へ、言葉を伝えようと思う。

父さん、ありがとう。大好きです。